



JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE

株式会社 三菱地所設計

永田康明・西垣和真・植田直樹・塚本敦彦・朱豊・朴成洙・小林はるか・森本順子

JAPAN SPORT OLYMPIC SQUAREは60以上のスポーツ関連団体のオフィスが集積する日本スポーツ界の総本山となる施設である。1、2Fには「日本オリンピックミュージアム」が整備され、「スポーツクラスター」の中核となる施設である。

神宮外苑地区が、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020）に向け新たなスポーツクラスターとし

て劇的に変化中、受け継がれて来た歴史性や同時期に進行した周辺計画との関係性を読み解き、神宮外苑地区の都市景観や人々のアクティビティの結節点・中核となるランドスケープを目指した。

敷地北側の広場は、日本オリンピックミュージアムの「MONUMENT AREA」として、「オリンピックムーブメントを体験し、レガシーを継承する広場」としてミュージアムと連携した広場空間が整備された。

東京2020も閉会を迎え、新たなオリンピックレガシーが刻まれた神宮外苑地区において、今後も多くの人に「オリンピックムーブメント、レガシー」を伝える空間としてあり続ける。

作品概要

作品名—— JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE
 所在地—— 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
 建築主—— 公益財団法人日本スポーツ協会
 公益財団法人日本オリンピック委員会
 設計監理—— 株式会社三菱地所設計
 設計協力—— 大林ランドスケープ設計事務所(大林万里江)
 施工—— 株式会社大林組、大林道路株式会社(外構工事)
 株式会社日比谷アメニス(造園工事)
 設計期間—— 2015年2月～2017年7月
 施工期間—— 2017年7月～2019年4月
 2019年12月～2020年2月(一部広場整備)
 規模—— 敷地面積 約3,317m²
 主要施設—— 事務所、ミュージアム、駐車場

作品評

60以上のスポーツ関連団体のオフィスが集積する日本スポーツ界の総本山であり、1階は「日本オリンピックミュージアム」が入居するビルの外構が対象である。歩道からもミュージアムの内部が見え隠れする施設に対し、大きく空間を開き、並木状の植栽と低木で修景している。北側の広場も、ゆるくカーブを描きながら、狭い空間を広がりが感じられる広場へと演出している。
 ビル自体がシンボリックな施設であることに対し、屋外空間全体では控えめな演出が施されている。オリンピックレガシーをどう表現するかに意識が捉えがちだが、様々なシンボル施設も控えて、収まるべき場所に収まり、洗礼された空間となっている点は、上手い手法だ。
 説明資料は写真や断面図、考え方をまとめた各種平面図と解りやすく、丁寧に取まらされている。ただし、強烈に訴えかけるインパクトに乏しく、現地の印象と同様に控えめな感じが見えた。ただし、本作品はオリンピック開催年の作品であり、そのレガシーであることから、特別賞の受賞となった。



①近隣住民に親しまれる人工芝の広場 ②オリンピックバリューを彫り込んだベンチ
 ③スタジアム通り沿道の歩道に刻まれた歴代オリンピックのレガシー
 ④偉大なオリンピックの記録を体感するアクセント舗装と岸記念体育会館から移植したオリーブ
 ⑤平面図

「景観のリレー・記憶のリレー」

スタジアム通り沿道には隣接街区とリレーするシラカシ並木、敷地西側には街区をまたいで連続する緑の回廊が整備され、隣接街区と一体に新たな神宮外苑地区の緑のネットワークを創出した。また、敷地内には前会館の岸記念体育会館竣工時（1964年）に常陸宮殿下により植樹された樹齢50年を超えるオリーブの移植、岸清一胸像が移設された。

園路やファニチャーは、トーチを繋げるように「重なり」、「つながる」スポーツの躍動感を感じる拡張性を持ったデザインとし、将来的に公園整備が予定される西側隣接敷地などへ今後も拡張し、リレーする余地を持った計画としている。

「オリンピックムーブメントの体験」

「オリンピックレガシーの継承」

「MONUMENT AREA」にはオリンピックレガシー、ムーブメントを「見る、知る、触れる」様々なモニュメントが散りばめられている。来訪者は四季の変化に富んだ植栽に囲まれる人工芝の広場に座り、寝ころび、寛ぎ、舗装に刻み込まれた日本初の金メダリストの偉大な三段跳びの記録などを体感する。

また、「MONUMENT AREA」のランドスケープと一体に配置検討されたオリンピックシンボルや聖火台のモニュメント、オリンピックにまつわる偉人像が別途工事により設置された。